

校異源氏物語・うす雲

冬になりゆくまゝにかはつらのすまゐいと、心ほそさまさりてうはの空なる心
ちのみしつゝあかしくらすを君も猶かくてはえすくさしかのちかき所に思たち
ねとすゝめ給へとつらき所おほく心みはてむものこりなき心ちすへきをいかに
いひてかなといふやうに思ひみたりさらはこのわか君をかくてのみはひな
き事なり思心あれはかたしけなしたいにきゝをきてつねにゆかしかるをしはし
みならはさせてはかまきの事なとも人しれぬさまならすしなさんとなむ思ふと
まめやかにかたらひ給ふさおほすらんとおもひわたる事なれはいとゝむねつふ
れぬあらためてやんことなきかたにもてなされ給とも人のもりきかん事は中な
かにやつくろひかたくおほされんとてはなちかたく思たることはりにあれと
うしろやすからぬかたにやなとはなうたかひ給そかしこには年へぬれとかゝる
人もなきかさうさうしくおほゆるまゝに前齋宮のおとなひものし給をたにこそ
あなかにあつかひきこゆめれはましてかくにくみかたけなめるほとををろか
にはみはなつましき心はへになと女君の御ありさまのおもふやうなることもか
たり給ふけにいにしへはいかはかりのことにさたまり給へきにかとつてにもほ
のきこえし御心のなこりなくしつまり給へるはおほろけの御すくせにもあらず
人の御ありさまもこゝらの御中にすくれ給へるにこそはと思やられてかすなら
ぬ人のならひきこゆへきおほえにもあらぬをさすかにたちいてゝ人もめさまし
とおほす事やあらむわか身はとてもかくてもおなし事おいさきとをき人の御う
へもついにはかの御心にかゝるへきにこそあめれさりとならはけにかうな心
なきほどにやゆつりきこえましと思ふ又てをはなちてうしろめたからむことつ
れゝもなくさむかたなくてはいかゝあかしくらすへからむなにゝつけてかた
まさかの御たちよりもあらむなとさまゝに思みたるゝに身のうき事かきりな
しあま君おもひやりふかき人にてあちきなしみたてまつらさむ事はいとむね
いたかりぬへけれとつゐにこの御ためよかるへからん事をこそ思はめあさく
おほしてのたまふ事にはあらしたゝうちたのみきこえてわたしたてまつり給て
よはゝかたからこそみかとの御こもきわゝにおはすめれこのおとゝの君の世
にふたつなき御ありさまなから世につかへ給はこ大納言のいまひときさみなり

おとり給てかういはらといはれ給しけちめにこそはおはすめれましたゝ人は
なすらふへき事にもあらず又みこたち大臣の御はらといへと猶さしむかひたる
おとりの所には人もおもひおとしおやの御もてなしもえひとしからぬものなり
ましてこれはやむことなき御かたゝにかゝる人いてものし給はゝこよなくけ
たれ給なむほとほとにつけておやにもひとふしもてかしつかれぬ人こそやか
ておとしめられぬはしめとはなれ御はかまきのほともしき心をつくすとも
かゝるみ山かくれにてはなにのはへかあらむたゝまかせきこえ給てもてなしき
こえ給はむありさまをもさゝ給へとをしふさかしき人の心のうらともにももの
とはせなとするにも猶わたり給てはまさるへしとのみいへはおもひよはりにた
り殿もしかおほしなからおもはむ所のいとをしさにしひてもえのたまはて御は
かまきの事はいかやうにかとの給へる御返によろつの事かひなき身にたくへき
こえてはけにおひさきもいとをしかるへくおほえ侍をたちましりてもいかに人
わらへにやときこえたるをいとゝあはれにおほす日なとゝらせ給てしのひやか
にさるへき事などの給ひをきてさせ給ふはなちきこえむ事は猶いとあはれにお
ほゆれと君の御ためによるへき事をこそはとねんすめのとをもひきわかれな
ん事あけくれのものおもはしさつれゝをもうちかたらひてなくさめならひつ
るにいとゝたつきなき事さへとりそへいみしくおほゆへき事と君もなくめのと
もさるへきにやおほえぬさまにてみたまつりそめてとしころの御心はへのわ
すれかたう恋しうおほえ給へきをうちたえきこゆる事はよも侍らしつるにはと
たのみなからしはしにてもよそゝに思のほかのましらひし侍らむかやすから
すも侍へきかななとうちなきつゝすくすほとにしはすにもなりぬゆきあられか
ちに心ほそさまさりてあやしくさまゝにもと思ふへかりける身かなとうちな
けきてつねよりもこの君をなてつくるひつゝみるたり雪かきくらしふりつもる
あしたきしかた行すゑの事のこらす思つゝけてれいはことにはしちかなるいて
ゐなともせぬをみきはのこほりなとみやりてしろききぬものなよゝかなるあ
またきてなかめたるやうたいかしらつきうしろてなとかきりなき人ときこゆ
ともかうこそはおはすらめと人ゝもみるおつる涙をかきはらひてかやうなら
む日ましていかにおほづかなからむとらうたけにうちなけきて

雪ふかみみ山のみちははれすとも猶ふみかよへあとたえすしてとのたまへ
はめのとうちなきて

ゆきまなきよしのゝ山をたつねても心のかよふあとたえめやはといゝなく
さむこの雪すこしとけてわたり給へりれいはまちきこゆるにさならむとおほゆ

ることによりむねうちつふれてひとやりならすおほゆわか心にこそあらめいな
ひきこえむをしひてやはあちきなどおほゆれとかるくしきやうなりとせめて
思かへすいとうつくしけにてまへにゐたまへるをみ給にをろかにはおもひかた
かりける人のすぐせかなとおもほすこの春よりおふす御くしあまそきのほとに
てゆらくとめてたくつらつきまみのかほれるほとなどいへはさらなりよその
ものに思やらむほと心のやみをしはかり給にいと心くるしければうちかへし
の給あかすなにかくちおしき身のほとならずたにもてなし給はるときこゆ
るものからねんしあへすうちなくけはひあはれなりひめ君はなに心もなく御車
にのらむ事をいそぎ給よせたる所には君みつからいたきていて給へりかたこと
のこゑはいとうつくしうて袖をとらへてのり給へとひくもいみしうおほへて
すゑとをきふたはの松にひきわかれいつかこたかきかけをみるへきえもい
ひやらすいみしうなければさりやあなくなるしとおほして

おひそめしねもふかければたけくまの松にこまつのちよをならへんのか
にをとなくさめ給さることはおもひしつむれとえなむたへさりけるめのとの
少将とてあてやかなる人はかり御はかしあまかつやうのものととりての人たま
ひによろしきわか人わらはなどのせて御をくりにまいらすみちすからとまりつ
る人の心くるしさをいかにつみやうらむとおほすくらうおはしつきて御車よす
るよりはなやかにけはひことなるをあなかひたる心ちともはしたなくてやま
しらはむと思ひつれとしおもてをことにしつらはせ給ひてちひさき御てうと
ともうつくしけにとのへさせ給へりめのとのつほねにはにしのわたとのき
たにあたれるをせさせ給へりわか君はみちにてねたまひにけりいたきおるされ
てなきなどはしたまはすこなたにて御くたものまいりなとし給へとやうくみ
めくらしては君のみえぬをもとめてらうたけにうちひそみたまへはめのとめ
しいてなくさめまきはしきこえ給ふ山里のつれくましていかにおほし
やるはいとおしけれとあけくれおほすさまにかしつきつみ給ふはものあひた
る心ちし給らむいかにそや人のおもふへきすなきことはこのわたりにいてお
はせてとくちおしくおほさるしはし人くもとめてなきなし給しかとおほ
かた心やすくおかしき心さまなれはうへにいとよくつきむつひきこえ給へれは
いみしううつくしきものえたりとおほしけりこと事なくいたきあつかひもてあ
そひきこえ給ひてめのとをのつからちかうつかうまつりなれにけり又やむこ
となき人のちあるそへてまいり給御はかまきはなにはかりわざとおほしいそく
事はなけれとけしきことなり御しつらひゐなあそひの心ちしておかしうみゆ

まいり給へるまらうとともたゝあけくれのけちめしなければあなかにめもたゝさりきたゝひめ君のたすきひきゆい給へるむねつきそうつくしけさそひてみえ給つる大井にはつきせず恋しきにも身のをこたりをなけきそへたりさこそいひしかあま君もいとゝなみたもろなれとかくもてかしつかれ給ふをきくはうれしかりけりなに事をか中くゝとふらひきこえ給はむたゝ御かたの人くゝにめのとよりはしめてよになき色あひを思ひいそきてそをくりきこえ給けるまちとをならむもいとゝされはよと思はむにいとおしければとしのうちにしのひてわたり給へりいとゝさひしきすまゐにあけくれのかしつきくさをさへはなれきこえて思らむことの心くるしければ御文なともたえまなくつかはす女君もいまはこゝとにゑしきこえ給はすうつくしき人につみゆるしきこえ給へりとしもかへりぬうらゝかなる空に思ふ事なき御ありさまはいとゝめてたくみかきあらためたる御よそひにまいりつとひ給める人のおとなしきほとのは七日御よろこひなとし給ふひきつれ給へりわかやかなるはなにともなく心ちよけにみえ給つきつきの人も心のうちには思ふこともやあらむうはへはほこりにみゆるころほひなりかしひむかしの院のたいの御かたもありさまはこのましうあらまほしきさまにさふらふ人くゝわらはへのすかたなとうちとけす心つかひしつゝすくし給にちかきしるしはこよなくてのとなる御いとまのひまなどにはふとはいわたりなとし給へとよるたちとまりなとやうにわさとはみえ給はすたゝ御心さまのおいらかにこめきてかはかりのすくせなりける身にこそあらめと思ひなしつゝありかたきまでうしろやすくのとかにものし給へはおりふしの御心をきてなどもこなたの御ありさまにおとるけちめこよなからすもてなし給てあなつりきこゆへうはあらねはおなしこと人まいりつかうまつりてへたうともゝ事をこたらす中くゝみたれたる所なくめやすき御ありさまなり山さとのつれくゝをもたえすおほしやれはおほやけわたくしものさはかしきほとすくしてわたり給とてつねよりことにうちけさうし給てさくらの御なをしにえならぬ御そひきかさねてたきしめさうそき給ひてまかり申し給さまくまなきゆふひにいとゝしくきよらにみえ給ふ女君たゝならすみたてまつりをくり給ふひめ君はいはけなく御さしぬきのすそにかゝりてしたひきこえ給ほとにともいて給ひぬへければたちとまりていとあはれとおほしたりこしらへをきてあすかへりこむとくちすさひていて給にわたとのゝとくちにまちかけて中将の君してきこえ給へり

舟とむるをちかた人のなくはこそあすかへりこむせなとまちみめいたうな
れてきこゆれはいとにほひやかにほゝゑみて

行てみてあすもさねこむ中／＼にをちかた人は心をくともなに事ともき、

わかつてされありき給人をうへはうつくしとみ給へはをちかた人のめさましきも
こよなくおほしゆるされにたりいかに思をこすらむ我にていみしう恋しかりぬ
へきさまをとうちまもりつゝふところにいれてうつくしけなる御ちをくゝめ給
つゝたはふれゐたまへる御さまみところおほかりおまへなる人／＼はなどかお
なくはいてやなとかたらひあへりかしこにはいとのとやかに心はせあるけは
ひにすみなしていへのありさまもやうはなれめつらしきにみつからのけはひな
とはみるたひことにやむことなき人／＼などにおとるけちめこよなからすかた
ちよういあらまほしうねひまさりゆくたゝよのつねのおほえにかきまきたら
はさるたくひなくやとは思ふへきを世にゝぬひかものなるおやのきこえなとこ
そくるしけれ人のほとなどはさてもあるへきをなとおほすはつかにあかぬほと
にのみあればにや心のとかならすたちかへり給ふもくるしくて夢のわたりのう
きはしかとのみうちなかれてさうのこのあるをひきよせてかのあかしにて
さ夜ふけたりしねもれいのおほしいてらるれはひはをわりなくせめたまへはす
こしかきあはせたるいかてかうのみひきくしけむとおほさるわか君の御ことな
とこまやかにかたり給つゝおはすこゝはかゝるところなれとかやうにたちとま
り給ふおり／＼あればはかなきくたものこはいるはかりはきこしめすときもあ
りちかきみてらかつらとのなどにおはしましまきはしつゝいとまおにはみた
れ給はねと又いとけさやかにはしたなくをしなへてのさまにはもてなし給はぬ
なとこそはいとおほえことにはみゆめれ女もかゝる御心のほとをみしりきこえ
てすきたりとおほすはかりのことはしいてす又いたくひけせずなとして御心を
きてにもてたかふ事なくいとめやすくそありけるおほろけにやむことなき所に
てたにかはかりもうちとけ給事なくけたかき御もてなしをきゝをきたればちか
きほどにましらひては中／＼いとめなれて人あなつられなる事ともゝそあらま
したまさかにてかやうにふりはへ給へるこそたけき心ちすれと思へしあかしに
もさこそいひしかこの御心をきてありさまをゆかしかりておほつかなからす人
はかよはしつゝむねつふるゝ事もあり又おもたゝしくうれしと思事もおほくな
むありけるそのころおほきおとゝうせ給ぬ世のおもしとおはしつる人なればお
ほやけにもおほしなくしはしこもり給しほどをたにあめのしたのさはきなり
しかはましてかなしとおもふ人おほかり源氏のおとゝもいとくちおしくよろつ
ことをしゆつりきこえてこそいとまもありつるを心ほそく事しけくもおほされ
てなけきおはす御かとは御としよりはこよなうおとな／＼しうねひさせ給て世

のまつりこともうしろめたく思きこえ給へきはあらねとも又とりたて、御うしろみし給へき人もなきをたれにゆつりてかはしつかなる御ほいもかなはむとおほすにいとあかすくちおしのちの御わさなどにも御こともむまこにすきてなんこまやかにとふらひあつかひ給ひけるそのとしおほかたよのなかさはかしくておほやけさまにものゝさとししけくのとかならてあまつ空にもれいにたかへる月日ほしのひかりみえくものたゝすまひありとのみ世の人おとろく事おほくてみち／＼のかむかへふみともたてまつれるにもあやしく世になへてならぬ事ともましりたり内のおとゝのみなむ御心のうちにわつらはしくおほししらるゝ事ありける入道きさいの宮春のはしめよりなやみわたらせ給て三月にはいともくならせ給ぬれは行幸なとあり院にわかれたてまつらせ給ひしほとはいいはけなくともものふかくもおほされさりしをいみしうおほしなけきたる御けしきなれは宮もいとかなくおほしめさることしはかならすのかるましきとしと思給へつれとおとろ／＼しき心ちにも侍らさりつれはいのちのかきりしりかほに侍らむも人やうたてこと／＼しうおもはむとはゝかりてなむくどくの事などもわさとれいよりもとりわきてしも侍らすなりにけるまいりて心のとかにむかしの御物かたりもなと思ひ給へなからうつしさまなるおりすくなく侍てくちおしくいふせくてすき侍ぬることゝいとよはけにきこえ給三十七にそおはしましけるされといとわかくさかりにおはしますさまをおしくかなしとみたてまつらせ給つゝ、しませ給へき御としなるにはれ／＼しからて月ころすきさせ給事をたになけきわたり侍つるに御つゝ、しみなとをもつねよりことにせさせ給はさりける事といみしうおほしめしたりたゝ、このころそおとろきてよろつの事せさせ給ふ月ころはつねの御なやみとのみうちたゆみたりつるを源氏のおとゝもふかくおほしいたりたりかきりあればほとなくかへらせ給もかなしき事おほかり宮いとくるしうてはか／＼しうものもきこえさせ給はす御心のうちにおほしつゝくるにたかきすぐせ世のさかへもならふ人なく心のうちにあかす思ふことも人にまさりける身とおほししらるうへの夢の中にもかゝる事の心をしらせ給はぬをさすかに心くるしうみたてまつり給てこれのみそうしろめたくむすほゝれたる事におほしをかるへき心ちし給けるおとゝはおほやかたさまにてもかくやむことなき人のかきりうちつゝ、きうせ給なむ事をおほしなけく人しれぬあはれはたかきりなくて御いのりなとおほしやらぬ事なしところおほしたえたりつるすさへいまひとたひきこえずなりぬるかいみしくおほさるれはちかき御き丁のものとによりて御ありさまなどもさるへき人／＼にとひきゝ給へはしたしきかきり

さふらひてこまかにきこゆ月ころなやませ給へる御心ちに御をこなひを時のま
もたゆませ給はすせさせ給ふつもりといと、いたうくつをれさせ給にこのころ
となりてはかうしなとをたにふれさせ給はすなりにたれはたのみ所なくならせ
給にたることゝなきなけく人々おほかり院の御ゆいこむにかなひてうちの御
うしろみつかうまつり給ことゝしころおもひしり侍ことおほかれとなにゝつけ
てかはその心よせことなるさまをもゝらしきこえむとのみのかに思ひ侍ける
をいまなむあはれにくちおしくとほのかにのたまはするもほのくきこゆるに
御いらへもきこえやり給はすなき給さまいといみしなとかうしも心よはきさま
にと人めをおほしかへせといにしへよりの御ありさまをおほかたの世につけて
もあたらしくおしき人の御さまを心になふわさならねはかけとゝめきこえむ
かたなくいふかひなくおほさるゝ事かきりなしはかはかしからぬ身ながらもむ
かしより御うしろみつかうまつるへき事を心のいたるかきりをろかならすおも
ひ給ふるにおほきおとゝのかくれ給ぬるをたに世中心あはたゝしく思給へらる
ゝに又かくおはしませはよろつに心みたれ侍て世に侍らむ事ものこりなき心ち
なむし侍なときこえ給ほとにもしひなどのきえいるやうにてはて給ぬれはい
ふかひなくかなしき事をおほしなけくかしこき御身のほとゝきこゆる中にも御
心はへなどの世のためしにもあまねくあはれにおはしましてかうけに事よせて
人のうれへとある事なとをのつからうちまするをいさゝかもさやうなる事の
みたれなく人のつかふまつる事をも世のくるしみとあるへきことをはとゝめ給
ふくとくのかたとでもすゝむるにより給ていかめしうめつらしうし給人なども
むかしのさかしき世にみなありけるをこれはさやうなる事なくたゝもとよりの
たからものえ給ふへきつかさかうふりみふのものゝさるへきかきりしてまこと
に心ふかきことゝものかきりをしをかせ給へれはなにとわくましき山ふしなど
まておしみきこゆおさめたてまつるにも世中ひゝきてかなしとおもはぬ人なし
殿上人となへてひとつ色にくろみわたりてものゝはへなき春のくれなり二条
院の御まへのさくらを御らむしても花のえむのおりなどおほしいつことしはか
りはとひとりこち給て人のみとかめつへければ御ねむすたうにこもり給て日
ひとひなきくらし給ゆふ日はなやかにさして山きはのこすゑあらはなるに雲の
うすくわたれるかにひ色なるをなにことも御めとゝまらぬころなれといとも
あはれにおほさる

入日さすみねにたなひくうす雲はもの思ふ袖に色やまかへる人きかぬ所な
れはかひなし御わさなともすきてことゝもしつまりてみかとも心のほそくおほ

したりこの入道の宮の御は、きさきの御世よりつたはりてつきくの御いのりのしにてさふらひける僧都古宮にもいとやむことなくしたしきものにおほしたりしをおほやけにももき御をほえにていかめしき御願とおほくたて、世にかしこきひしりなりける年七十はかりにていまはをはりのをこなひをせむとてこもりたるか宮の御ことによりていてたるをうちよりめしありてつねにさふらはせ給このころは猶もとのことくまいりさふらはるへきよしおと、もす、めのたまへはいまはよゑなといとたへかたうおほえ侍れとおほせこのかしこきによりふるきこ、ろさしをそへてとてさふらふにしかなるあか月に人もちかくさふらはすあるはまかてなとしぬるほとにこたいにうちしはふきつ、世中の事ともそうし給ふついていとそうしかたくかへりてはつみにもやまかりあたらむと思給へは、かるかたおほかれとしろしめさぬにつみをもくて天けんおそろしく思給えらる、事を心にむせひ侍つ、いのちをはり侍りなはなにのやくかは侍らむ仏も心きたなしとおほしめさむとはかりそうしさしてえうちいてぬ事ありうへなに事ならむこの世にうらみのこるへく思ふ事やあらむ法しはひしりといへともあるましきよこさまのそねみふかくうたであるものとおほしていはけなかりし時よりへたて思ふ事なきをそこにはかくしのひのこされたる事ありけるをなむつらくおもひぬるとのたまはすればあなかしこさらにほとけのいさめまもり給しむこんのふかきみちをたにかくしと、むる事なくひろめつかうまつり侍りまして心にくまある事なにか侍らむこれはきしかたゆくさきの大事と侍事をすきおはしましにし院きさいの宮た、いま世をまつりこち給おと、の御ためすへてかへりてよからぬ事にやもりいて侍らむか、るおい法しの身にはたとひうれへ侍りともなにくひか侍らむ仏天のつけあるによりてそうし侍なりわか君は生まれおはしましたりし時より故宮のふかくおほしなけく事ありて御いのりつかうまつらせ給ゆへなむ侍しくはしくは法しの心にえさとり侍らすことのたかひめありておと、よこさまのつみにあたり給し時いよくをちおほしめしてかさねて御いのりともうけ給はり侍しをおと、もきこしめしてなむ又さらにことくはへおほせられて御くらゐにつきおはしまし、まてつかうまつる事とも侍しそのうけ給はりしさまとてくはしくそうするをきこしめすにあさましうめつらかにておそろしうもかなしうもさま／＼に御心みたれたりとはかり御いらへもなければそうつす、みそうしつるをひんなくおほしめすにやとわつらはしく思ひてやをらかしこまりてまかつるをめしと、めて心にしらてすきなましかは後の世まてのとかめあるへかりけることをいま、てしのひこめ

られたりけるをなむかへりてはうしろめたき心なりとおもひぬる又このことをしりてもらしつたふるたくひやあらむとの給はすさらになにかしと王命婦とよりほかの人この事のけしきみたる侍らするによりなむいとおそろしう侍天へむしきりにさとし世中しつかならぬはこのけなりいときなくものゝ心しろしめすましかりつるほとこそ侍つれやうゝ御よはひとりおはしましてなに事もわきまへさせ給へき時にいたりてとかをもしめすなりよろつの事おやの御世よりはしまるにこそ侍なれなにつみともしろしめさぬかおそろしきにより思給へけちてしことをさらに心よりいたし侍へりぬることゝなくゝきこゆるほどにあけはてぬれはまかてぬうへは夢のやうにいみしき事をきかせ給て色ゝにおほしみたれさせ給故院の御ためもうしろめたくおとゝのかくたゝ人にて世につかへ給もあはれにかたしけなかりける事かたゝゝおほしなやみて日たくるまていてさせ給はねはかくなむときゝ給ておとゝもおとろきてまいり給へるを御らむするにつけてもいとゝしのひかたくおほしめされて御涙のこほれさせ給ぬるをおほかた故宮の御事をひるよなくおほしめしたるころなれはなめりとみたまつり給その日式部卿のみこうせ給ぬるよしそうするにいよいよ世中のさはかしき事をなけきおほしたりかゝるころなれはおとゝはさともえまかて給はてつとさふらひ給ふしめやかなる御物かたりのついでに世はつきぬるにやあらむもの心ほそくれいなぬ心ちなむするをあめのしたもかくのとかならぬによろつあわたゝしくなむ故宮のおほさむ所によりてこそ世間の事も思ひはゝかりつれいまは心やすきさまにてもすぐさまほしくなむとかたらひきこえ給いとあるましき御事なり世のしつかならぬことはかならずまつりことのなをくゆかめるにもより侍らすさかしき世にしもなむよからぬ事ともゝ侍けるひしりのみかとの世にもよこさまのみたれいてくる事もろこしにも侍けるわかくにゝもさなむ侍ましてことはりのよはひともの時いたりぬるをおほしなけくへき事にも侍らすなどすへておほくのことゝもをきこえ給かたはしまねふもいとかたはらいたしやつねよりもくろき御よそひにやつし給へる御かたちたかふ所なしうへもとしころ御かゝみにもおほしよる事なれときこしめしゝ事のゝちは又こまかにみたてまつり給ふつゝことにいとあはれにおほしめさるれはいかてこのことをかすめきこえはやとおほせとさすかにはしたなくもおほしぬへき事なれはわかき御心ちにつゝましくてふともえうちいてきこえ給はぬほとはたゝおほかたの事ともをつねよりことになつかしうきこえさせ給ふうちかしこまり給へるさまにていと御けしきことなるをかしこき人の御めにはあやしとみたてまつり給へと

いとかくきたくときこしめしたらむとはおほさゝりけりうへは王命婦にくはしきことはまほしうおほしめせといまさらにしかしのひ給ひけむことしりにけりとかの人にもおもはれしたゝおとゝにいかてほのめかしとひきこえてさきくのかゝる事のれいはありけりやとゝひきかむとそおほせとさらについてもなければいよく御かくもむをせさせ給つゝさまくゝのふみともを御らんするにもろこしにはあらはれてもしのひてもみたりかはしき事いとおほかりけり日本にはさらに御らんしうる所なしたとひあらむにてもかやうにしのひたらむ事をはいかてかつたへしるやうのあらむとする一世の源氏又納言大臣になりて後にさらにみこにもなりくらゐにもつき給つるもあまたのれいありけり人からのかしこきに事よせてさもやゆつりきこえましなとよろつにそおほしける秋のつかさめしに太政大臣になり給へき事うちくゝにさため申給つゐてになむみかとおほしよするすちのこともらしきこえ給けるをおとゝいとまはゆくおそろしうおほしてさらにあるましきよしを申返し給故院の御心さしあまたのみこたちの御中にとりわきておほしめしなからくらゐをゆつらせ給はむ事をおほしめしよらすなりにけりなにかその御心あらためてをよはぬきにはのほり侍らむたゝもとの御をきてのまゝにおほやけにつかうまつりていますこしのよはひかさなり侍りなはのとかなるをこなひにこもり侍りなむと思ひ給ふるとつねの御ことのはにかはらすそうし給へはいとくちおしうなむおほしける太政大臣になり給へきためあれとしはしとおほす所ありてたゝ御くらゐそひてうしくるまゆるされてまいりまかてしたまふをみかとかあすかたしけなきもの思ひきこえ給て猶みこになり給へきよしをおほしのたまはすれと世中の御うしろみし給へき人なし権中納言大納言になりて右大将かけ給へるをいまひときわあかりなむになに事もゆつりてむさてのちにとまかくもしつかなるさまにとそおほしける猶おほしめくらすに故宮の御ためにもいとをしう又うへのかくおほしめしなやめををみたてまつり給もかたしけなきにたれかゝる事をもらしそうしけむとあやしうおほさる命婦はみくしけ殿のかはりたる所にうつりてさうし給はりてまいたりおとゝたいめむし給てこの事をもしものゝついてにつゆはかりにてももらしそうし給事やありしとあないし給へとさらにかけてもきこしめさむことをいみしき事におほしめしてかつはつみうる事にやとうへの御たを猶おほしめしなけきたりしときこゆるにもひとかたならす心ふかくおはせし御ありさまなとつきせすこひきこえ給斎宮の女御はおほしゝもしるき御うしろみにてやむことなき御おほえなり御よういありさまなとも思さまにあらまほしうみえ給へれ

はかたしけなきものにもてかしつき、こえ給へり秋のころ二条院にまかて給へりしむてんの御しつらひいと、か、やくはかりし給ていまはむけのおやさまにもてなしてあつかひきこえ給ふ秋のあめいとしつかにふりておまへのせむさいの色／＼みたれたる露のしけさにいにしへの事ともかきつ、けおほしいてられて御袖もぬれつ、女御の御かたにわたり給へりこまやかなるにひいろの御なをしすかたにて世中のさはかしきなどことつけ給てやかて御さうしむなれはす、ひきかくしてさまよくもてなし給へるつきせすなまめかしき御ありさまにてみすのうちにいり給ぬみき帳はかりをへたて、みつからきこえ給ふせむさいともこそこのりなくひもとき侍りにけれいともすさまじきとしなるを心やりて時しりかほなるもあはれにこそとてはしらによりゐたまへるゆふはえいとめてたしむかしの御事ともかの野宮にたちわつらひしあけほのなとをきこえいて給いともあはれとおほしたり宮もかくれはとにやすこしなき給けはひいとらうたけにてうちみしろき給ほともあさましくやはらかになまめきておはすへかめるみたてまつらぬこそくちをしけれとむねのうちつふる、そうたてあるやすきにしかたことに思ひなやむへきこともなくて侍りぬへかりし世中にも猶心からすき／＼しき事につけてもの思のたえすも侍けるかなさるましき事もの心くるしきかあまた侍りし中につるに心もとけすむすほ、れてやみぬることふたつなむ侍るひとつはこのすき給にし御ことよあさまじうのみ思ひつめてやみ給ひにしかなかき世のうれわしきふしと思ひ給へられしをかうまでもつかうまつり御らんせらるゝをなむなくさめにおもふ給へなせともえしけふりのむすほ、れたまひけむは猶いふせうこそ思給へらるれとていまひとつはのたまひさしつなころ身のなきにしつみ侍しほとかた／＼に思ひ給へし事はかたはしつ、かなひにたりひんかしの院にものする人のそこはかとなって心くるしうおほえわたり侍りしもおたしう思ひなりにて侍り心はへのにくからぬなと我も人もみたまへあきらめていとこそさはやかなれかくたちかへりおほやけの御うしろみつかうまつるよろこひなとはさしも心にふかくしますかやうなるすきかましきかたはしつめかたうのみ侍をおほろけに思しのひたる御うしろみとはおほししらせ給らむやあはれとたにのたまはせすはいかにかひなく侍らむとの給へはむつかしうて御いらへもなければさりやあな心うとてこと事にいひまきはし給ついまいかてのとやかにいける世のかきり思ふ事のこさす後のよのつとめも心にまかせてこもりゐなむと思ひ侍をこの世の思いてにしつへきふしの侍らぬこそさすかにくちおしう侍りぬへけれかならすおさなき人の侍おいさきいとまちとを

なりやかたしけなくとも猶このかとひろけさせ給て侍らすなりなむのちにもか
すまへさせ給へなときこえ給ふ御いらへはいとおほとかなるさまにからうして
ひとことはかりかすめ給へるけはひいとなつかしけなるにきゝつきてしめゝ
とくるゝまておはすはかゝしきかたののそみはさるものにてとしのうちゆき
かはる時ゝの花もみち空のけしきにつけても心のゆくこともし侍りにしかな
春の花のはやし秋の野のさかりをとりゝに人あらそひ侍けるそのころのけに
と心よるはかりあらはなるさためこそ侍らさなれもろこしには春の花のにしき
にしくものなしといひはへめりやまとことのはには秋のあはれをとりたてゝお
もへるいつれもとき時につけてみたまふにめうつりてえこそ花鳥の色をもねを
もわきまへ侍らねせはきかきねのうちなりともそのおりの心みしるはかり春の
花の木をもうへわたし秋の草をもほりうつしていたつらなるのへのむしをもす
ませて人に御らむせさせむと思給るをいつかたにか御心よせ侍へからむときこ
え給にいとときこえにくき事とおほせとむけにたえて御いらへきこえ給はさらん
もうたてあはれはましていかゝ思わき侍らむけにいつとなきなかにあやしときゝ
しゆふへこそはかなうきえ給ひにし露のよすかにも思給へられぬへけれとしと
けなけにのたまひけつともいとらうたけなるにえしのひ給はて

君もさはあはれをかはせ人しれすわか身にしむる秋のゆふ風しのひかたき

おりゝも侍かしときこえ給にいつこの御いらへかはあらむ心えすとおほした
る御けしきなりこのついてにえこめ給はてうらみきこえ給ことゝもあるへしい
ますこしひかこともし給つへけれともいとうたてとおほいたるもことはりにわ
か御心もわかゝしうけしからすとおほしかへしてうちなけき給へるさまの物
ふかうなまめかしきも心つきなうそおほしなりぬるやをらつゝひきいり給ぬる
けしきなれはあさましうもうとませ給ぬるかなまことに心ふかき人はかくこそ
あらさなれよいいまよりはにくませ給なよつらからむとてわたり給ひぬうちし
めりたる御にほひのとまりたるさへうとましくおほさる人ゝみかうしなとま
いりてこの御しとねのうつりかいひしらぬものかないかてかくとりあつめやな
きのえたにさかせたる御ありさまならんゆゝしうときこえあへりたいにわたり
給てとみにもいり給はすいたうなかめてはしちかうふし給へりとうろとをくか
けてちかく人ゝさふらはせ給てものかたりなとせさせ給かうあなかななる事
にむねふたかるくせの猶ありけるよとわか身なからおほしゝらるこれはいとに
けなき事なりおそろしうつみふかきかたはおほうまさりけめといにしへのすき
は思ひやりすくなきほどのあやまちに仏神もゆるし給ひけんとおほししますも

なをこのみちはうしろやすくふかきかたのまさりけるかなとおほしゝられ給女
御は秋のあはれをしりかほにいらへきこえてけるもくやしうはつかしと御心ひ
とつにものむつかしうてなやましけにさへし給をいとすくよかにつれなくてつ
ねよりもおやかありき給ふ女君に女御の秋に心をよせ給へりしもあはれに君
の春のあけほのに心しめ給へるもことはりにこそあれ時／＼につけたる本草の
花によせても御心とまるはかりのあそひなとしてしかなとおほやけわたくしの
いとなみしけき身こそふさはしからねいかて思ふ事してしかなとたゝ御ためさ
う／＼しくやと思こそ心くるしけれなとかたらひきこえ給山里の人もいかな
とたえずおほしやれとゝころせさのみまさる御身にてわたり給事いとかたし世
中をあちきなくうしと思ひしるけしきなとかさしもおもふへき心やすくたちい
てゝおほそうのすまはせしと思へるをおほけなしとおほすものからいとを
しくてれいのふたんの御念仏にことつけてわたりたまへりすみなるゝまゝにい
と心すこけなる所のさまにいとふかゝらさむ事にてたにあはれそひぬへしま
してみたてまつるにつけてもつらかりける御ちきりのさすかにあさからぬを思
ふに中／＼にてなくさめかたきけしきなれはこしらへかね給いとこしけき中よ
りかゝり火とものかけのやり水のほたるにみえまかふもおかしかるすまゐに
しほしまさらましかはめつらかにおほえましとの給に

いさりせしかけわすられぬかゝり火は身のうき舟やしたひきにけん思ひこ

そまかへられ侍れときこゆれは

あさからぬしたの思ひをしらねはや猶かゝり火のかけはさはけるたれうき

ものとをししかへしうらみ給へるおほかたものしつかにおほさるゝころなれはた
うとき事ともに御心とまりてれいよりはひころへたまふにやすこしおもひまき
れけむとそ